

平成二十三年九月一日発行 第二十一巻第九号 通巻第一四三号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成23年9月号

岡井省二創刊



甚平着て

高橋将夫

よき土と水と日のあり夏大根
緑陰にゐれば見えくる樹間かな
夕焼けの下地は漆黒なりしかな
父として子として過ぎし父の日ぞ

夫を呼ぶときは日傘を傾けて
やさしさも今のうちだけ業平忌
夏の湖妬心は底に沈殿す
エコカーの音か蝮の這う音か
炎帝に包囲されたる大和かな
蟻の道紆余曲折のありにけり
甚平に着替へて欲も得もなし

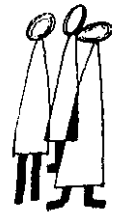
槐安集

水野恒彦

常とはに箱庭の人立ち尽す
更衣渚といふは濡るる砂
海鞘食ふて時のゆくまま過ぎゆくまま
つれづれの身に抱きけり竹婦人
ろくぐわつの犢鼻^{たふさぎ}禪風^{げんぷう}に翻り

延広禎一

花槐紅絹のたふさぎ祝ひかな
豌豆が莢に九ツいのちなが
梅花藻の流れに溶ける想夫恋
楽ちんの縞のすててこ寝音曲^{コトナリ}
「異」の臨書したりき大暑かな



加藤みき

人に会ひ淡海に会ふ祭かな
片蔭の紅殻格子なりしなり
ほととぎすのあと雀らの賑賑し
散鮓^{ぼらずし}を取り分けてをり半夏生
舟虫よ慌てふためくことなかれ

石脇みはる

加茂茄子の朝の湿りを持ちぬたり
枇杷青し平衡感を失ひし
夏夕ベコンチネンタルタンゴかな
半夏生黄河は色を持ちぬたり
蜘蛛の糸過去も未来も紡ぎしか

中島陽華

嘉言あり大山蓮華匂ひ出す
白骨の章読んでをり夏祭
藍襖は舐めてみるべし桜蓼
七変化咲いて写楽の大首絵
消息の讃岐富士なり麦の秋

竹内悦子

六月や水郷めぐるかいつぶり
弁慶の引き摺り鐘や令法咲く
山門は虫喰ひだらけ百足の死
凌霄花のうぜんや昨夜の雨の水溜り
鞍馬山下界只今大夕焼

栗栖恵通子

萬緑の中より双子乳母車
籐椅子の祖父の形にくぼみをり
裸子を待ちうけてゐる両腕
阿蘇一山巻き取られをり芝刈機
青葉木菟考をおもへば国のこと

大島翠木

冷酒のほてり蹠くれなひに
梅雨に入る塩と砂糖の白さかな
夏鶯肺一つばいに生きめやも
死が其処に浮いてゆらめく金魚玉
亡き妻や辣蕪漬けに沈みゐる

雨村敏子

赤玉葱白玉葱絹の道

白牡丹花の奥なる弥勒かな
巽より夏至の風立つ千枚田
賜りし命抱ける白地かな
あをあをと柿の若葉に雨しとど

小形さとる

夏始むるに脱帽の一句あり
椎の花つんと翁の山ならむ
白南風や雲辺寺より人下り来
鮪もよし酒もよろしと涼むかな
臺交る巨きな闇となりぬたり

本多俊子

薔薇園に入りて貴婦人顔でゐる
緑陰や眉なつかしき人と会ひ
玫瑰の開けば臍の笑ひけり
シーベルト曇りの東北^きよ夏の海
星空の中へとまぎれ螢かな

近藤きくえ

さくらんぼ色と甘さを含みをり
夕薄暑グリーンスープのふつふつと
太陽と何かたらふか朴の花
鎮魂の鐘ついてをり山法師
薬草の湯の香のしむる梅雨の冷

近藤喜子

金粉をこぼす灯蛾の快樂かな
浮巢にて眠りたき夢いまもなほ
母はやく世を去りし後の螢かな
ジョーカーを切り一目散の蜥蜴
木を降りてくる跳べぬ蝸牛

谷村幸子

新樹晴あれこれ言ひて絵馬見上ぐ
桑の実の熟れて神苑誰もぬず
若葉光行き合ふ人も我が身にも
蛸葉師に一息いれぬ心太
飛ぶ雲や精いつぱいの立葵

瀬川公馨

借金を相殺したる夏大根
老石榴朱肉の花を抱きたる
蟻の列みんな葬儀に行くやうな
深草の少将たりき薄暑なる
シャーロックホームズばりの夏帽子

久保東海司

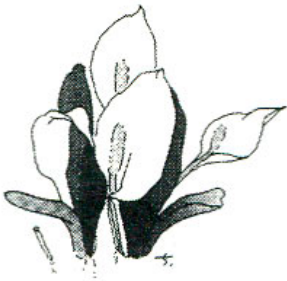
まぶしさは日照雨の後の若楓
このあたりまで猿の来る夏館
緑蔭に入りて恋文手渡しぬ
温泉の汗に歪む浴衣の流し文字
父の齡越えてしみじみ菖蒲湯に

西村純太

ただ眺む梵字の壁の五月闇
月明に濡れてをりたる蟻地獄
とある日の山寺にゐる羽抜鶏
棺造り鯨尺にて夏至の雨
短夜や硯の海の反魂香

中野京子

楠青葉南方熊楠風に立つ
夏霧の晴れて高嶺をはるかにす
万緑の内なる闇の弾けけり
青空に扉を開けて更衣
仮の世の胡瓜とまるとに支柱をす



槐市集

柳橋繁子

先生の家庭訪問青田道
遭難碑に花を手向けて山開く
産土の神のよろこぶ田植歌
日盛りのしじま靴音近づきぬ
丸橋の下のせせらぎ芹の花

山田佳子

大いなるものに包まれ卯波立つ
夏嵐風は一日吹くつもり
真実は曖昧にして早梅雨
朝ぐもり後もどりせず歩きをり
おほかたは枷ふえし事蓮咲ける

山根征子

麦畑を抜ければ近江平野かな
麦秋やローランの月永久の蒼
夏雲やインダス河の青き音
梅雨さなか生きる証の頭痛あり
猫の子を啣えて路地に雨しとど

吉田順子

夏至の日や五体明るく目覚めけり
あめんぼう己が世界を跳ねまわり
枇杷の実やふつと洩らせし独り言
月下美人ひらく力をじつと待ち
合歡咲くや久闊の友待ちてをり



槐集

高橋将夫選

茅の輪くぐり人新しくなりにけり
守口 岩下 芳子

昼も夜も大葎切の天下なる
よろけ縞着て螢を追ひにけり

高き音の調子づきたる祭笛

鉄塔のほどよき高さ梅雨鴉

海神に誘惑されてゐる金魚

人生の重荷を降ろす夏至の影

瘋狂の奥の座敷や蠅叩

虹ひとつ挙げてお嫁に行く狐

雲海の上をハワイアン・ファルセット

未来図に赤きサルビア植ゑておく

今日と言ふ日がありハイビスカスの緋

鈴蘭の押し花若き日の詩集

きらきらと風の音する蛇の衣

万緑のあはひにカリヨンの響き

柳川 晋

岡崎 岩月優美子

一匹の蟻が行方を決めかねし
枚方 熊川 暁子

糸曳きて蜘蛛の落ちくる心字池
あぢさゐは変化半ばや雨女

ひと言はつつみ匿して茄子の花

ほうたるは獣の匂ひして亘る

春風やばつと少女になりたる子
福岡 九竜庵 玄

青郵も楸郵も師や雨安居

生かす神信じてセルを着流して

夏安居や平助筆の形見わけ

風鈴の軍配風や囀 碁仇

蟻の列その最後尾よりわたし
安城 近藤 公子

蛇とびあがるに吾もバケツの音に

過去をすて舞ひつくしをる梅雨の蝶

奥の手は神の手なりし梅雨晴れる

血液のさらさら梅雨の茸かな

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

茅の輪くぐり人新しくなりにけり 岩下 芳子
茅の輪をくぐって何だか自分が変わったような気持ちになったの
だろう。ことの前後の変化に着眼するのも作句の一手法。

へよろけ縞着て蛍を追ひにけり 芳子へもよろけ縞の浴衣で蛍
を追うありさまが想像されておもしろい。

虹ひとつ挙げてお嫁に行く狐 柳川 晋
狐の嫁入りに虹をあげるといふ精神の風景に驚かされる。俳
諧といふべきか、メルヘンといふべきか、ともかくめでたい。
へ人生の重荷を降ろす夏至の影 晋へ の句にも大いに感心させ
られた。夏至の影は片陰の典型で、そんな狭い所に降ろしてい
いのかと人事ながら気にかかる。

未来凶に赤きサルビア植ゑておく 岩月優美子
自分の未来、人類の未来、宇宙の未来、誰の未来かは知らぬ
が、そこにサルビアが植えてある。きつと輝く未来が描かれて
いるのであろう。

一匹の蟻が行方を決めかねし 熊川 暁子
行方を決めかねている一匹の蟻。近くを整然と行進する蟻の
列が見えてくる。列に加われれば、何の迷いもなく進めるかもし

れないのに。

生かす神信じてセルを着流して 九竜庵 玄

「神は死者を復活させてくれる方」と聖書に有る。セルを着
流して、作者はそれを信じてみようという。来世があると思
うと、何となく安心する。死んだとき、来世がなかったとしても、
その時は何もわからない。それなら、有ると信じて生きるのも
一理あると思っている。

血液のさらさら梅雨の茸かな 近藤 公子

「梅雨の茸」に「さらさらの血液」を思う心の不思議。梅雨
の茸がうつとおしだけに、さらさらの血液を欲するのか。

晩節を煙らすひとつばたごかな 犬塚李里子

「ひとつばたご」は「なんじゃもんじゃ」の別名。なるほど、
晩節を煙らす感じがしないでもない。

新緑や漏刻に音の無かりける 中田 禎子

漏刻は水時計。まさに音も無く刻を刻むのである。

藤椅子の母ありし日もきしみたる 近藤 紀子

母ありし日も、そして今もきしむ藤椅子の様子を描写して、
母への思いを詠んでいるのである。

心変り七たびにして濃紫陽花 谷岡 尚美

紫陽花の七変化は月並みだが、行き着く先の色の濃さを切り
取ったところに共感した。物事の始まりや終点、あるいはその
途中などを切り取るのも作句の手法の一つ。